

▽取組事例名

玉川サイコー実現化プロジェクトの推進

▽取組期間

平成24年度～
(継続中)

▽取組概要

過疎・高齢化の進む中山間部の玉川地域において、NPOを核とした官民協働の地域活性化を「玉川サイコー！実現化プロジェクト」と銘打ち、推進することで、サイクリストを中心とした来訪者の獲得、農村アートの展開など、地域の人々が郷土愛から一歩踏み出し、行動することで、行政経費の支出に頼らない元気な地域づくりを推進している。

▽取組みの背景

市町村合併により周辺地域となった旧町村部では、支所機能の縮小、職員の減少や補助金のカットなどで住民サービスの低下を懸念し、歯止めのかからない過疎、高齢化に不安がある。しかし、地域にはそれぞれ固有かつ有効な資源があり、知恵や技を持った人たちがいる。そうした地域の人たちが目標を持って地域を元気にするための企画・立案を行い、行政と協働して自ら行動することで地域が注目され、来訪者が増え、交流が高まり、元気を取り戻すことのできる仕組みを作る必要があった。みんなが参加することで行政経費に頼らず、アイデアと行動力で地域づくりを進めていくのだ。

▽取組みの狙い・具体的内容

(取組みの狙い)

まず夢を語る。そして核となる団体を作り、その夢を実際に実現していく姿を見て頂き、夢に近づける実感を持って頂く。特定分野に限らずさまざまな分野の提案を連携させていくことで小さなコトの寄せ集めでも集まると大きな成果になる、誰でもできるという体験を味わうことで地域づくりへの参加のインセンティブを高める。

(具体的内容)

- ・平成24年度
市内に「玉川サイコー！実現化プロジェクトチーム」を設置し、地域の声を聞いて「玉川サイコー！実現化計画」を策定、総合計画の地域版として82のプランを計上、推進母体となるNPO法人玉川サイコーを設立した。
- ・平成25年度
交通安全協会の詰め所をサイクリスト休憩所「Rest Rest Rest」にリノベーションして来訪者に開放し、まちの案内機能を高め、地域固有の資源玉川ダムを活用するため、ダム湖に水上サイクリングができるシャトルバイクを導入、併せてまちのグルメとなる玉川ダムカレーを地域の飲食店と一緒に開発し、5店舗で販売を開始した。
鈍川温泉での足湯の完成を受け、第2土曜日にマルシェを定期開催、鈍川地域の農村アート化基本計画を策定し、標識の少ない山間地に住民自ら100枚の手作り案内板を設置するサイン化計画を推進。サインとNPOのガイドブックを連動させ、来訪者が地域を巡りやすくした。さらにボランティアで万葉の森を整備し、ガイドブックを発行した。
また、旧陸地部5町村の活性化団体が協働して中学生が別の町に遠足に行く「子どもシャッフル」や5町村の山に登る登山マップの作成を行い、合併後の住民同士の一体感の醸成を図った。
さらに玉川近代美術館のミュージアムメイトの会、玉川地域自主防災会の結成など文化や防災面でも地域住民が繋がる仕組みを構築するなど分野を問わずできることから矢継ぎ早に実施し、計画の61%、50のアクションプランを実現した。これらの活動を通して、NPOの会員も倍増し、100名を超えた。

▽取組を進めていくなかでの課題・問題点（苦労した点）

地域の人たちに関心や興味を持って参加頂くため、他に例のない斬新な取り組みを行うよう心がけたが、その発想に苦慮した。また、予算を使わず手作りの活動を行うが、楽しくおしゃれでハイセンスなデザインや質を保つのに苦労した。地域には色んな技の持ち主がいるが最初はそうした人たちの参加を促すのが難しかった。

☆工夫した点

テレビや新聞等のパブリシティを活用し、取組みの過程をみていただく工夫をした。また、予算のない中でPRを図るため、活動の写真を市広報の表紙に取り上げて頂くなどした。さらに、個別の取組みを地域の中で関連させ、一つのストーリーに仕立ててわかりやすくする工夫をした。

市の財政出動が見込めない中、県の新ふるさとづくり事業、三浦保愛基金、ECPRのまちづくり活動アシスト事業、農水省の交付金など提案型の事業に応募し、採択を受けることで財源の捻出を図った。また、事業の推進に当たっては、NPO以外の商店や地域の皆さんと一緒に取組み、成果がみんなの手柄になるよう工夫した。

▽取組みの効果

2年前には目にすることがなかったサイクリストの姿を玉川の山道でも日常的にたくさん見かけるようになってきた。また、町内外から「玉川は面白いことしよるねえ」「玉川は元気やねえ」という声が多く聞かれるようになった。玉川ダムカレーは連日人気で、それ以外の飲食店でも売り上げが伸びている。

これまで役場に「あれやって、これやって」と言っていた皆さんが、まず、自分たちに何ができるかを考え、行動するようになってきた。アイデアのある人はNPOに相談すれば何かができるという機運が生まれ、支所の職員も、できない理由を述べるのではなく、どうやったらできるかを地域の皆さんと一緒に考えるようになってきた。25年度は鈍川地区に移住者3家族が引っ越してきて、地域行事やNPOの取組みにも積極的に参加頂いており、さらに空き家を探して移住待ちの家族も増えている。

また、木工倶楽部の皆さんが奈良原宝経印塔の木製レプリカを、万葉の森のボランティアの皆さんが石碑を市に寄贈するなど、自分たちが「大好きな玉川のために何かをしよう」といった動きが生じてきている。

▽住民（職員）の反応・評価

職員はこれまでのように与えられた職務だけをこなしてよしとするのではなく、一人一人が提案し、企画し、実現を図ろうとする気持ちが芽生えている。住民の皆さんは「次は何をやるんだろう」とわくわくドキドキし、私も手伝いたいという申し出も増えてきている。マスコミに取り上げられ、「見たよ」「頑張ってるね」と声を掛けられるのが嬉しく、さらなるやりがいに繋がっている。

☆取組み効果を踏まえたフォローアップ

これまでイベント的に取り組んできたことを玉川ダムカレーのようにきちんとビジネスに仕立てて地域に定着させていくことが肝要である。支所やNPOが率先してやってみせて、「それ位なら自分たちでできる」と思ってもらい、ビジネスとして継続してもらいたい。また、コミュニケーションデザインをきちんと描くことで将来像を見据えながら計画的に、着実に歩みを進められるよう行政としてのケア体制を整える必要がある。

☆将来的な構想のほか、他団体へのアドバイス

26年度は、稲わらで体高4mのイノシシを田んぼに作る稲わらアートや鈍川地域の特産品を食べながら走る鈍川溪谷グルメマラソン、鈍川温泉サイクリング大会などが計画されており、各集落が競って来訪者のおもてなしができるような体制を作っていく。また、地域の中心産業である農業の振興を図る必要があり、鈍川米、龍岡米のブランド化、グルメと連動した玉川パスタなどの地産地消、六次産業化などを積極的に推進していきたい。

人口の減少に対し、交流を増やすことで地域の活力を維持するため、公の施設の見直しで廃止が提案されている施設を地域に無償貸与し、交流促進施設として活用する計画も進めている。

さらに、25年度から越智郡陸地部の朝倉、波方、大西、菊間の活性化団体とも連携して、子どもシャッフルやリレーマルシェ、登山マップの作成など共同のプロジェクトの展開を始めている。玉川でのサイン化計画などは他でも容易に応用が効くし、既にガイドブックの制作を始めた団体もある。

玉川のような中山間の過疎・高齢化の進む周辺地域はどこにでもあり、同じような問題を抱えている。玉川の経験やノウハウはいつでも公開しているので活用し、応用して頂きたい。